

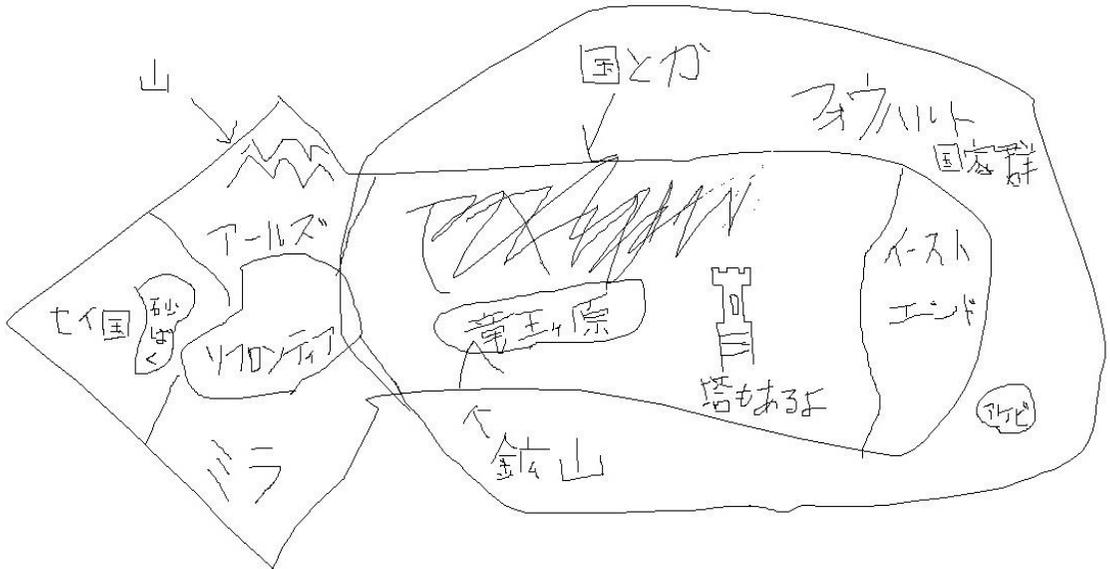


SAIHIKA 2016 02

# SAHIKA201602

表紙：SAHIKA201602 「葯束」……鴫和	1
目次：SAHIKA201602 寅の子絵巻付き……マウス	2
小説：	
少年少年、夢を見る……矢野ヒカル	3
君のいない世界はこんなにも素晴らしい9…T. K	6
キュウセイの魔女とその騎士 I……マウス	13
From Writers 最低限の光……矢野ヒカル	19

## 「デンっ☆」



コノハ「ええ……。なんじゃコレ」

寅「何って見れば分かるだろ世界地図だよ。子どもたちに分かりやすいと思ってな」

コノハ「東大陸ってこんなずんぐりむっくりしてたか？ というかソフロンティアに見えるんじゃが……」

寅「いや、この丸はこのエリアが国家群に属するっていう説明だよ。んん、余計なもんつけたかなあ。まあ少しずつ改善していけば……」

コノハ「いや待て、またこんな餓鬼の落書きにも劣る物を——」

寅「ああ聞こえない聞こえない。これからも描いていくからな」

これは、一つの女子校が男子校へと移り変わる物語である。

少年少年、夢を見る

矢野ヒカル

自然科学分野において、優れた研究は同時期に各所で行われていることが多い。ある機関が研究結果を報告すれば、ほんの数カ月後に同じような内容が別の機関からも報告される。だが、表彰されるのは前者のみだ。科学というのはある種、早い者勝ちの世界なのである。

科学者の栄光と挫折云々は置いておくとして、同じ考えを同じ時期に多くの人間がしているというのが問題である。ある女子校が共学になるとしたらどうだろう？ 健全なる男子なら、甘美な響きを感じてしまうのも当然だ。「ヘエ、あの女子校共学になったんだ」と興味のないふりをしながらも、チラ見という名のガン見をして手元の受験情報誌に赤線を引く。級友に志望校を聞かれても、はぐらかし真意をひた隠しにする。そしていざ受験の日に驚愕するのだ。こいつら、あんなことを言いつつ興味津々ではないか。全く愚かな連中よ。大層立派な言葉を口にしつつも、心の底では女々々<sup>おんなおんな</sup>。高校というのは勉学の為であって、貴様らの交尾相手を見つける場ではないのだぞ。まったく、恥ずべきことである。このように考えている男は志望校に落ちてその後の人生も滑りまくれ。

合格発表は郵送で行われる。受験番号が貼りだされ、あるものは歓喜の涙を流しあるものは失意のあまり、やはり涙を流す。それを受験の醍醐味と呼ぶのだ、というのは古い考えなのだろうか。風物詩を一つ失い、郷愁を実家で感じつつも通知の封を開ける。大きな封筒が来た次点で結果は察していたが、合格である。落ちたとは思っていなかったが、それでも安心したのは事実。胸をなでおろし、顔はほころぶ。これで私の高校生活が始まるのだな、と。魅惑の元女子校で青春を謳歌するのだ。

入学式、私は激昂した。新入生は私含め全員男だったのである。同じ考えは同じ時期に多くの人がしている。甘い生活を夢見る純情自慢の男達、一同に集いけり。

女子校から共学に変わる。さすれば新入生は女子のほうが多い。そう思って行動した。結果はどうだ？ 男しかいない。描いていた教室の風景はどうだ？ 男しかいない。体育の授業は？ 家庭科の授業は？ 男しかいない。

男しかいない。

上級生は女子 100%だ。だが、彼女らは下心をあますところなく魅せつけた新入生男子共に冷やかな目を向けた。部活は男子部と女子部に隔たれた。一年生と上級生の壁は厚い。小学生の頃上級生に感じていたえも言われぬ威圧感をまさか高校になっても感じることになるとは。ともかく、男しかいない。出会いがない。あれもこれも、みんなこいつらのせいだ。なんて。そんなことは口が裂けても言えない。私も男子であり、出会いを求めてきた哀れな新入生の一人だからだ。

新入生全員が絶望し、互いが互いを信用出来ない。考えうる限り最悪の状態である。いつリーマン・ショックが起こるか分からないのだ。

そんなことを頭の中では考えていたが、実際の高校生活は至って良好であった。女は馬鹿なので女同士の確執は長く続くが、男は馬鹿なので男同士の確執はすぐ終わるのだ。慣れてしまえば男しかない学校というのも心地良いものがある。異性の視線を気にせず好きなことが出来る。猥談に花を咲かせたり、猥談で盛り上がり、猥談を膨らました。話を膨らませるといふ表現はよく使うが、猥談は膨らませるものなのだろうか？猥談で膨らむのではないかと。なんてことを真剣に話してはいるが、このやり取りも当然猥談である。

女三人寄れば<sup>かしま</sup>姦しいとはよく言ったものである。では男が三人寄ればどうなるのか？男という漢字を下に二つ、上に一つ。これから何を連想するか？そう、人間ピラミッドだ。昨今、小学校で組み体操の高層化による被害が話題になっているが、小学生のやる人間ピラミッドなど可愛いものだ。男子高校生がやる真の人間ピラミッドはそんなものじゃない。もはやそれは芸術。芸術は爆発だ、というのは優れた作品には危険が伴うという事を教えてくれる良い教訓である。つまり、ここから落ちると死ぬ。今、私が鎮座しているのは10段ピラミッドの頂点だ。瘦身だからというだけで選ばれた大役。人の上に立つ者をそんなふうを選んで良いのかと思いつつも愚民を踏みしめる特権に惚気ていた。だが実際はどうだ。「あわれ、盛者必衰は人の世の常なり」私は嘆いた。上に立つ者は落ちる覚悟を持つ者のみ。私にそんなものがあるのか？無論、無い。そんなものがある人間はそれが体重に反映される。

困り果て、困り果てながらも使命は果たす。それが男というものであるが逃げ出したい。逃げ出したかった。そもそも人間ピラミッドってなんだよ。明らかに危険じゃないか。考えた奴は誰だ？馬鹿なのか？ああそうだな、男が三人寄っても馬鹿にしかならない。当然だ。当然過ぎて語る必要もない。

地獄の体育祭を終えた。私には虚無感が芽生えた。女子の尻を追いかけて入学して手に入れたのは何だ？男の血と汗と涙と諸々の液体の結晶だけじゃないか。「ああ、どうしようもない」<sup>童貞が決定づけられた三年間</sup>ニヒリズムを抱き、布団に包まった。馬鹿なので次の日には忘れた。

そうして春が過ぎ夏が過ぎ秋が過ぎ、冬になり、いつの間にか春になった。春、始まりの季節。この一年間スタートラインに立ち、走りだすこと無く英気を養ってきた我々新二年生男子は期待に満ち溢れていた。そう、ロマンスは下級生との間にも発生する、と。「先輩」何と良い響きではないか。可愛らしく頬をふくらませる少女、内向的で感情を表に出せない少女、少し生意気で先輩をからかう少女もまたよい。良いではないか。ついにスタートの時が来た。

入学式、私は激高した。新入生は全員男だったのである。男しか入学してこなかった学校に入学するほどの気概を見せた少女はいなかった。仮にいてもそんな強者を少女と呼ばない。

悲しみに暮れながら春が過ぎ夏が過ぎ秋が過ぎ、冬になり、春になった。春、始まりの季節。この二年間スタートラインに立ち、走りだすこと無くひたすら自己鍛錬を行ってきた。猥談のスキルは磨かれ、口を開けば乙女が逃げ出し、歩いて出来た足跡には草木も生えぬ。童貞は夜叉となった。戦いが始まる。

入学式、私は激高した。新入生は全員男だったのである。かくして女子校は男子校となった。校庭の桜

の木は全て切られ、メタセコイアに変わった。メタセコイアの花言葉は童貞である。嘘だ。

春が過ぎ夏が過ぎ秋が過ぎ、最後の冬、卒業の冬。そんな F から始まる言葉(糞のことだ)で形容したくなる高校生活も終わる。当初夢見た甘酸っぱい美しい高校生活は送れなかったが、概ね楽しい三年間だった。卒業式には人間ピラミッド 10 段が 4 つ完成した。私にとってはもう慣れたものだ。

最初は殺意しか湧かなかった同級生童貞達。夜叉だの何だの名乗ってはいたが、結局本質は変わらなかった。良き友人たちである。だから、彼らは語らない。これから先、それぞれが行く道を。語らず、けれどそれで十分だ。男同士ってそういうものだろう。

実を言うと、私はちょっとだけいい思いをする予定だ。あの名門女子大が来年度から共学になるらしい。女子大、良い響きだ。数少ない男子になるだろう、甘い生活が待っているだろう。楽しみに胸躍る。だけど今は、友人との別れを惜しむ。

卒業。そして、その先の春へと。

四年後、ある男子大学が誕生した。彼らは悲しみの人間ピラミッドを作り上げる――。

あとがき

言いたいことはあるか？ 私はある。とりあえず、こういう文章は緩急を付けるために使ったほうが良いんじゃないかなーと。先月号の LOVE MAGIC CARNIVAL みたいな勢い重視の文章のちゃんとした版と、今回の文章を組み合わせると、いい感じのテンポになるんじゃないかな？

まあ、久しぶりに地の文を書きたくなったので、ね。じゃあ、縦書きにしろよ、と思うんだけどね。まあ、ヒカル以外縦書きだから、バランスとしては横書き以外ありえないのですよ。

地の文が支配的な文体、ただし一人称視点。今度は三人称を書いてみたい。まあ、ノウハウが全く無いから大変だけど。どうせ三人称を目指しても変則一人称になるんだよね。

さて、と。SAIHIKA もこれで12回目。一年っすよ。これまで書いたのは、「たい焼き(不条理狂気)」「プラドン(不条理ラブコメ)」「哲学者(未完成)」「電波(電波)」「天球少女6回(魂の作品)」「ラブマカ(勢いラブコメ)」「今作(男馬鹿)」

二年目への抱負？ なんだろうね。天球少女みたいな巨大プロジェクトを指導させようと思う。アイデアはもう出てる。後は書くかどうか、なんだけど。まあ、頑張る。

来月も乞うご期待!!

君のいない世界はこんなにも素晴らしい

T.K

前回までのあらすじ。

学校から帰って家の扉を開けるとファンタジー世界だった。焦った俺は、引越してきたところで相談する相手もおらず、妹に電話をかけてしまった。

それから侵入者に間違われかけたり、本当に来た侵入者と戦ったり、と思えばぞいつらの複雑な事情を話されたりで、てんやわんや。

密度の濃い二日間を過ごし、今、三日目の朝。

俺は母から、「妹は二日前にそっちへ行った」と聞かされた。しかし俺はあいつを見ていない。俺の家に来ていれば既に会えているはずだ。

何かに巻き込まれたと見て間違いないが、それがこつち側の事件であれば俺の出る幕はない。日本の警察がなんとかしてくれるだろう。

問題なのは、あちら側の国家戦争に巻き込まれている場合だ。俺の所為であり、俺が解決しなければならぬ。

どちらにせよ心配なことに変わりはないが、可能性が高いのは後者だ。タイミングが噛み合いつぎている。

「ねえ」

本当は、今すぐにも探しに行きたい。

学校なんてほっぽり出して……………」

……それから、どうする？ フロレリヤド・レクエンシアに迷い込んでいたのならノリスがすぐにも言ってくれるだろうし、他の国へ探しに行くため

の扉を見つけようとしても、ロアで見つかるはずもない。見つかるならば、フロレリヤド・レクエンシアはとくに侵攻されて滅んでいるだろう。それにヴェルだって、虱潰しで扉を見つけたと言っていた。

だからといって死でもなく走り回ることに意味があるとは思えない。偶然にも扉を見つけたとしても、その国の王はきっと、ノリスほど甘くはない。

これらを踏まえて考えれば、今は我慢すべき時だというのがサルでも分かる。俺は俺自身にそう言い聞かせた。

そう言い聞かせるしかないほどに、冷静さを失っていると自覚していた。

「ねえっば」

俺が感情に正直に動いて良いのは、明日だ。

革命に参加するか否かの答えを今日の夕方に出す、とヴェルには言ったが、俺の思いはすでに決まった。

ヴェルの国に妹が、<sup>わか</sup>和花がいる可能性だつてある。ヴェルの話では王は日本の軍力を恐れていると言っていたが、築山さんがあまり協力的でない以上、他の人を攫っていることもありえる。もしそうなっていれば、和花を取り戻す

ために争いは避けては通れないだろう。交渉だけで終わればいいが、そうなるとはあまり思えない。

捕まっているかもしれない和花を助けること、他の国に捕まっていた場合は、そこから和花を取り戻すためにヴェルとヴェルの国の力を頼るため、俺は革命

に加わらなければならない。

「つえっ」

「いつてえー！」

突然デコピンを喰らう。経験したこともないような重い一撃が額に走った。

「はいプリント」

何事もなかったかのように、前の席の女の子はプリントの束を差し出した。

「えっ、ああ、ごめん」

「うん。穂下くんさ、ずっと上の空だよね？ そりゃまあ新しい環境だけど、そんなに緊張する？」

「いや、そういうわけじゃ……」

プリントを後ろへ回しながら答える。

この人は確か、一左多さん<sup>ひだた</sup>、だったかな。珍しい苗字だし、自己紹介が印象的だったから覚えてる。髪型はサイドテール？ だったかで、活発そうな感じそのままのかわいい人だ。

「ふーん？ じゃあ、部活何入るか迷ってるのか？」

「……そ、そんなところ、かな」

「へえー！ だったら私と一緒にだね！ そんなに心配なら今日の放課後、私と一緒に部活見に行く？」

「ごめん、今日は用事があったって……」

「そう？ なら来週の月曜日？」

「大丈夫、だけど」

「よし、決まり！ 決まったからには、そんなに思い詰めないでね？」

「……………ありがとう」

一左多さんは仰々しく腕を組むと、ウム、と頷いた後、椅子に座り直しながら前を向いた。

月曜日、生きていればね。危うく口をつけて出かけた言葉を慌てて飲み込んだ。でも、なぜだか気が紛れたというか、元気を貰った気がする。明日の土曜

日、明後日の日曜日で戦いが終わるかどうかはわからないが、月曜日にはちゃんと、一左多さんとの約束を果たせばいいな、と思った。

それから戦争のことはあまり深く考えず、授業を受け、放課後になった。

ホームルームも終わり、教科書を鞆にぶち込んでいると、

「穂下くん」

やけに聞き覚えのある、落ち着いた声。横を見ると築山さんが立っていた。

「帰ろうか」

「えーと……なぜここにいます？」

「一緒に帰るため、だけど」

にわかには教室がざわめく。

違う、違うんだ。この人は俺じゃなく赤髪で目つきの悪い奴が好きなんであつて彼女でもなんでもないんだ。そんな目で見ないで一左多さん……………

「そ、そうだね！ 二人とも待つてくれるんだから急がないとね！」

「その通り」

俺が大きめの声で言ったことを築山さんが肯定すると、ざわめいていた教室は忽ちいつもの調子に戻り、みんないそいそと帰り始めた。他人の色恋沙汰に目がないというか……飢えたハイエナという表現がしっくりくる。

「君のお姫様が、待ちわびて——」

「あーはいはい行きましょうねえええー！」

築山さんの手を引いて強引に教室を去った。その後の教室内の空気は知らないし知りたくもない。

「わざとですか」

夕日を背に受けて、帰路を歩く。築山さんの歩幅に合わせてゆっくりめに歩

きながら、俺は半ギレで築山さんに問いかけた。

「別に。それより敬語は、いい。最初なんて、子ども扱いだったくせに」

「まさかそれを根に持ってたとは……。わかったよ」

それから一拍置いて、築山さんは前を向いたまま、

「決まったの」

とだけ言った。

「決まったよ」

「そう」

俺の下した決定がわかっているのか何なのか、築山さんはそれ以上何も聞いてはこなかった。

結局それ以降、特に何も話すことはなく、俺のアパートの前に着いた。アパートは塀で囲まれており、その入り口のところから一階の廊下が見える。そこから、ちょうど一番奥の部屋に築山さんと同じ制服を来た人が入っていくのが見えた。この三日間、何かとよく見かけのお隣さんだ。

「大変だね」

「この苦労をわかってくれるのは築山さんだけだよ……」

靴から鍵を取り出し、自宅の扉を開ける。すると、

「おかえりなさいー」

なぜかノリスが待っていた。それに扉を覆うように作られていた小屋の内装も豪華になっている気がする。というか明らかに豪華になっている。

「ただいまー」

俺の脇をすり抜け、築山さんが一番乗りする。

「ただいま。どうしてノリスがここに？」

扉を閉め、鍵を閉めつつ言った。

「そろそろ帰ってくる頃合いかと思い、待っていたんです。今日はここでお泊り会なのでー」

ノリスは歳相応の無邪気な笑顔を俺に向けた。いつものようなお姫様といった感じではなく、普通の女の子のような、そんな感じで。

「全く、このお姫サンは……ハア」

呆れた様子のヴェルは部屋の隅にある椅子に頬杖をつき、足を組んで怠そうに腰掛けていた。築山さんも早いもので、ヴェルから見るとテーブルを挟んで向かい側に座り、優雅に黒茶（見た目はコーヒー、味は紅茶のやつ）を飲みつつ茶菓子っぽいものを食べていた。

「聞くまでもなさそうだが、一応聞いてやる。テーマはどうすることに決めたんだ？」

「ヴェルが築山さんを連れて行くなう、俺も行く」

「ハア!？」

築山さんがこちらを見て、グツと親指を立てた。

「負けるわけにいかないことは、ヴェルにだって十分わかっているだろ。築山さんの隠密狙撃は、切り札にだってなり得る」

俺が本気だということがわかったヴェルはすぐに築山さんのほうを向いたが、築山さんは「何か問題でも？」と言いたげに、澄まし顔で黒茶にミルクを垂らしていた。どうやら渋かったらしい。

ヴェルは大きな溜め息をついた。

「クソどもが。もう勝手にしやがれ」

「では作戦会議をしてから、明日に備えて英気を養いましょうー」

ノーリスはニコニコ顔で隣の部屋へ俺たちを案内した。そこにはパン、謎のお肉、謎の野菜などまあいろんな謎の料理が乗った丸いテーブルが一つと、椅子が四つ置いてあった。

促されるまま椅子に座る。ノーリスが「料理はご自由に」と言うので適当に食べながら話をすることにした。謎のお肉にフォークを刺したところで、食べ物のお皿にまじってテーブルの中央に置かれた地図が目に入った。

「これは？」

「オレの国、『フェンリル』の地図だ」

「へえ、これが……」

城を囲うように町があるのではなく、小高い丘の上に城があり、その下に広がる平地に町があるというのが、ノーリスの国、フロレリヤド・レクエンシアとは決定的に違つところだった。

「町があるというより、所狭しと家が密集している感じだな……」

「その通りだ。フェンリルは人口に対して土地がねえ。その上、土壌が痩せててなあ。ロアで騙し騙しやってきたが、そろそろ限界もいいたこだ」

「ふむ……」

道幅は狭く、ぐちゃぐちゃに家が詰め込まれている。その中の家の一つに、扉のマークが書いてあった。

「これが日本と繋がる扉？」

「ああ。その家は革命軍がおさえているから出入りに心配はいらねえ。城への潜入も、オレが前もって城内にジレットを隠してきたから直接乗り込める」

「用意周到だな……」

「準備に何年もかかっているからなあ。それくらいはしてある。だが、問題はそ

こからだ」

ヴェルの声のトーンが落ち、肌を撫ぜる空気が張り詰めた。

「城には兵が大勢いる。あの王サマはトコトン臆病だからなあ。兵士一人でも気づかれりゃ、即座に王サマへ報告されて王直属の親衛隊以外はロアが使えないようにされちまう。そうなりや終わりだ。オレ以外の革命軍は全員ロアが使えなくなり、戦争にすらなりやしねえ。その状態で王サマの元へ辿り着き、殺すなんてことは不可能だ」

「だから俺が必要だ、と……」

ヴェルは不敵に笑った。

「ああ。テメーがいれば不可能が可能になる」

俺がいるだけで戦況が覆る。

ヴェルと決闘をする前の会話で、

『ゼロアスと直接契約を結んでいる者は絶対的な王であり、その王と「子」の契約を結んでロアを使えるようになって国民は王のさじ加減ひとつで使えるロアを大幅に制限される』

そしてそもそも、事の発端。侵入者としてのヴェルと戦うときに、

『あなたはこれからゼロアスと契約します。私とではなく、ゼロアスと』

とノーリスに言われ、言われるがままのことを行って二つに増えた花の形をしたゼロアスに対しては、

『成功したようですね。それはどちらも本物です』

と。

ヴェルたちが革命を成功させるために行わなければいけないことで、ゼロアスを奪う以外に存在したもう一つの答え。

「一国の王でもないやつが、ゼロアスと契約していることが必要。名譽はなく、富もない。死んでも構わないような人間でありながら、ゼロアスと契約を交わし、革命に加担することによるハイリスク・ハイリターンに賭ける考えに至る人物が必要だった。そうだね？」

「そうだ。そんな都合のいいヤツなんていねーと思ってたがなア。テメーはお姫サンと同等の権限を持つている。オレはゼロアスのことは詳しくは知らねーし、テメーら二人の意見が対立したときの処理なんても知らねエ。まず一つのゼロアスと二人が契約するなんてことがありえねエ。ぶつちやけそんなモンはテメーらで勝手に話し合ってくれりやあ良い。重要なのは……」

答えを催促するように、ヴェルは話すのをやめ、こちらを見た。

「俺という人物が王として『子』と契約ができる、ということ」

「状況はこれで五分だ」

ヴェルは得意げな表情をした。築山さんが「うざい」と呟いたが、気分が良いのか聞こえていないのか、特に反応しなかった。

「この作戦にはさらなるメリットがある。王が特定の兵以外のゼロアスを完全に封じりや、ほとんどの場合でオレ達側だけがロアを使えることになる。革命軍は数で劣っているが、これで形勢逆転だ。ロアを使えなくさせることが無意味だと兵がいくら訴えようと、あの王サマの性格から考えりや何もできねエだろーよ」

思わず感心した。

ただ考えてみれば、ヴェル達は元々ここまで思索した上でこの国にゼロアスを奪いに来たわけであり、「ヴェルが担うはずの役割が俺に変わったただけやんけ！」というツツコミはやめてください。

「だから、今朝にも言ったが、テメーにやってほしいことはゼロアスを使ってオレたち革命軍の全員と契約を交わすこと、それだけだ。それ以上は何も要求しねエ。そこからフロレリヤド・レクエンシアに帰るも、共に戦うも、テメーが決める。オレは知らねエ」

「……ああ」

ヴェルは黒茶を一口飲んで一息ついた。ノリスと築山さんは傍らで俺たちのことを固唾を呑んで見守っている。さつきは茶々を入れていた築山さんも、もう何も言葉を発しようとはしない。

「最後の意思確認だ。テメーがすぐに離脱するときは身の安全を最大限保証する。だが、戦闘に巻き込まれないと言い切れねエ。扉を通った瞬間から、そこは敵地だ」

「わかっている」

「それでも……テメーは来てくれるか」

「行くよ。ヴェルたちが勝たないと、次はこの国だ」

ふと、一瞬だけ、ヴェルの表情が和らいだ気がした。けれどすぐに元通りの仏頂面に戻り、俺に手を差し出した。

「礼は全部終わってからだ。よろしく頼む」

「こちらこそ」

俺たちはフェンリルの地図の上で握手を交わした。

すると隣で小さく「おー」という声が聞こえ、見てみると、ノリスと築山さんの二人が隣同士でこじんまり座っていて、音のない拍手をしていた。

ヴェルはすぐに握手をやめ、頭を軽く掻いた。

「全く、調子の狂うヤツらだゼクンが……」

そんなヴェルを見て俺は少しだけ笑った。即座に睨みつけられたが、ヴェルが何か言う前にノーリスが勢い良く椅子から立ち上がった。

「話もまとまりましたし、いよいよお待ちかねのお泊り会です！」

「帰ってきた時から思ってたんだけど、なんで急にお泊り会？」

待っていたのは主にノーリスなので、と言ってしまつのも可哀想なのでやめておいて、素直に疑問をぶつける。

どうせ築山さんに要らない知識を吹きこまれたんだろうけど。

「それがですね、昨晩はひより様とヴェルテスト様とたくさんお話できました、そこでひより様から、日本にはお泊り会といって、みなでお料理したり、寝る前にトランプなるものをしたり、恋バナなるものをしたりする文化があるというのを聞いたんです！」

どうせ築山さんに要らない知識を吹きこまれてましたね。恋なんて存在しないこの国に、恋バナなんて無縁にもほどがある。今朝のお風呂騒動のときに比べれば全然問題がないレベルではあるけども。

ちらりと築山さんの方を見やると、無言でブイサインをされた。無視した。

「だからこの小屋も整備したんだね」

「はい！ ひより様の話から想像して、露天風呂というものも作って……みました……」

ノーリスは途中まで軽快に話していたが、急に声が小さくなり、ついには尻すばみになって消えてしまった。

俯いているので分かり辛いですが、顔が赤くなっているような。

と、そこで俺も今朝のことを思い出し、慌てて話題を変えようと思った。

「そ、それにしてもノーリスってお風呂好きだよな！」

変えようと思った。変わるには言っていない。

横で築山さんがお腹を抱えて苦しそうに笑っているのが目に入ったが、今は放っておこう。後で覚えていやがれ。

「えっと……このあたりの土地は昔から水が有名なんです。城から流れ出る水も、地下から湧き上がってくるもので、あの場所から水を湧き上がらせているのではなく、水が湧き上がる地点なので城が建てられたのです。この国は水とともにあると言っても過言ではなく、その影響もあつてか、この国の人々は皆さん口アの適性が水なんです。ですから、私だけが好きなのではなくて、国民の皆さんは水浴びやお風呂が好きですよ」

俺の質問は結果的に功を奏したようで、お姫様モードに戻ったノーリスはさらさらと説明してくれた。

あれだけ笑っていた築山さんもいつの間にか真顔に戻っていた。ざまあみやがれ。

……と、まあそんなことをやってるものだから、

「ヴェルがいなくなってるみたいだけど」

「明日に備えて、寝るって」

「あいつ、いつの間……」

「でも、穂下くんも、早く寝たほうがいい。明日は早いし、何が起るかわからない」

「そうだな……」

「仕方ないですね……」

築山さんの「もつともな意見に、ハイテンションだったノーリスもすっかり静かになっていた。たぶん、この子はこの子なりに緊張を解きようとしてくれて

いたのだろう。

「じゃあわたしも、お風呂入って、寝るから。おやすみ」

「はい、わかりました。おやすみなさい」

「おやすみ」

とどここ去って行く築山さんを見ると、俺たちは椅子に座った。

「今更だけごめん、勝手に約束しちゃって。いけなかったかな」

「フェンリルへ行って契約を交わすことですか？」

「うん」

俺が首を縦に振ると、ノーリスは首を横に振った。

「その力は、私がこの国を守ってもらうため、行次に差し上げたものです。そしてその目的は、すでに果たされました。これから行次がその力をどう使おうと、私が口出しする権利はありません。それどころか、ゼロアスのせいでさらなる戦火に巻き込まれようとしている……それもこれも、私が行次を頼ってしまったせいです。ごめんなさい。……私が弱かったから……」

「……そんなに自分を卑下するものじゃない。「ここ数日、いろいろあつて疲れてるんだろう。築山さんの言うとおり、もう寝よう」

とても十三歳の女の子が口に出すような台詞には聞こえなかった。これまでも様々な重圧があつたことが容易に想像できる。そんな痛々しい吐露をこれ以上聞いている余裕は、俺にだってない。

「そうですね……すみません、こんな時に変なことを言つて……」

ノーリスは無理をして笑つた。椅子から立ち上がり、べこりと頭を下げると、

「では、おやすみなさい」

「うん。おやすみ」

俺の返答を聞き、去っていった。

一人残った俺は大きな溜め息をついてから、机に広げてある地図を手にとつた。

俺が革命に加担することで流れる血も、消える命も、どれだけあるかわからない。極めて無責任で、自己中心的だ。

だが、俺の背には、今、いろんなものが乗っかっている。

それが壊れてしまふくらいなら……。

「は……」

風呂に入っても、ベッドに横になっても、頭の中を轟く黒い塊は一向に消えようとしなかった。拳句の果てに、女の子のすすり泣く声とゆっくりドアが開く音が聞こえる。幻聴なんて、俺もいよいよ末期だなあ。気にしないように目を閉じていると人の気配はどんどん近くなつていき、

「ひつく……行次……」

「うえあー……つてノーリスか。びっくりさせないでくれ……」

「ごめん……なさい……でもどうしてもためでもどうしようもなくつて……」

「…………いいよ」

子どものように泣きじゃくるノーリスを見て、追いつ返すなんてことができるはずもなく、俺はノーリスのほうへ背を向け、ベッドの端に寄つた。ノーリスは空いたところへパタンと倒れこみ、俺の背にびつたりとくっついた。

しばらくすると泣く声も止み、寝息が聞こえてきた。

そして俺も、知らぬ間に眠りに落ちた。

キウウセイの魔女とその騎士

〜リフロンティアと矢印大陸の動乱

マウス

最後の空を望もうと、マキナは体を振った。肉の千切れる音と共に勢いよく血が流れ出て行く。誰の目にも彼の命が長くないことは明らかで、むしろまだ生きていることが不思議なくらいだった。大木に潰され、胃の辺りから下は原型を留めていない。

最早痛みも感じない身体で、彼は残される人々を想った。

『父さん、母さん、シリル、ギルドの皆。ごめん、終わりみたいだ』  
彼は誰ともなしに言葉を発しようとしたが、ひゅーひゅーと、出るのは掠れた空気の音のみ。

刻々と迫る死にも彼は不思議と恐怖はなかった。だが、まっさらな蒼穹とそこを流れる白い雲を見ながら、この色鮮やかな世界を楽しむことが出来なくなることを惜しいと感じていた。

やがて視界もおぼつかなくなり、黒く滲んでいく。

「……………っあ」

最後の瞬間は、眠るように。



マキナが受けた依頼は、鉱山周辺に居座るゴブリンの集団を追いつぶすことだった。

滞りなく現地に到着した彼は、近場の森に目星を付けて搜索を始める。

「これでナザール銀貨三枚か。イザレウスだかヘザレヌスだか知らないが、鉱山の所有者は大層稼いでるだろうに、足元見るよなあ」

ぼやきながらも、周囲への警戒は怠らない。小柄な体をもつゴブリンは群れで狩りをする。中には弓を扱うような器用な者もいるので、すぐに対処できるように心構えをしていた。

「さてさて、おいでなすったか」

気付きながらもあえて剣を抜くような真似はせず、相手に聞こえるような声で話す。ことを構える気がないことを暗に知らせるのだ。

「ニンゲン」

「安心してくれ、俺一人だ。何の用かは……分かるよなあ？」

短剣や斧を携えた何体かのゴブリンがマキナを囲っていた。その内の一体、一番体格が大きく装備も整ったゴブリンがマキナの正面に立った。

「アノ山は、オレ達ノ——」

「ああ、そうだった。確かにあの山はあんたらゴブリンのものだったが、あそこは人間にとつてとても大事な場所なんだ。金や魔鉱石は多くの者にとつて価値あるものだし、そこで働く鉱夫だって生活が懸かっている。だから、ゴブリンの群れと人間は契約を交わした。住処を譲る代わりに金と食料を渡したはずだ」

「アイツラハ、先祖カラ伝ワル土地ヲ売り渡シタングダ！ 俺タチは違ワズ、山ヲ守ル！」

「ここ東大陸では、いかなる種族も同じルールの下生きている。あんたらの代表がうんと言ったんだ、今更数人が反抗したって覆ったりしないんだよ。それに、あんたらだって嫌がらせや妨害をしただけで誰一人死なせていないだろ？ 今からでも遅くない、諦めて他の住処を探してくれ。なんなら、俺が依頼主に口聞きしても——」

「ウルサイ、ウルサイ！ 話スダケ無駄ダナ、オマエタチ！」

ゴブリンたちが手に持つ武器を構え始める。

「待てよ、クソツ」

苦々しい顔をしながら、マキナは渋々剣を抜いた。一般的なブロードソードである。

真っ先に飛び掛かってきた右方のゴ布林に対し、手に持つ短剣を弾いてみせた。そのまま交差するように脇をすり抜けて、不利な立ち位置から脱する。

「言っておくが、ウデは断然の俺の方が上だ。頼むから、争うなんて馬鹿なこととは止める。無駄な血を流させる気はないんだ」

「森ダ！ 我々ニハ地ノ利ガアル。森隠レルのだ」

「話を聞けよ！」

ゴ布林が散らばって森の中へと消えていく。マキナは素早くその一体をひっ捕らえた。

「離せ、離せ！」

「少しの間我慢だ。悪いな、我儘かもしれないが、それでも俺は斬りたくない」

近くの木にロープで縛り付ける。いざというときの為に、それなりの装備は揃えていた。

「ああ、これで銀貨三枚か……。いや、そんなこと言っている場合じゃないな！」

マキナは追跡戦を始める。



「さあ、後はあんた一人だぜ、リーダー」

剣を構え、リーダー格のゴ布林へとにじり寄っていく。

「仲間タチヲ、キッタノカ……？」

「いや、縄で縛っただけだ。大人しく諦めてくれるなら、すぐに開放するさ。何度も言うが、俺は血を流させる気はない。無理かも

知れないが、直接交渉出来る様に依頼主にも掛け合ってみるからさ、だから——」

「……………俺ハ、ドウシタライイ？」

ゴ布林が斧を降ろした。安堵したマキナは、彼に笑顔で語りかける。

「あんたらもさ、ずつとこの森にいたんだろう？ 外はさ、広いぜ。驚くような場所や、人々がいる。俺も家を飛び出して——今じゃちっけな一人の冒険者だが、外の世界の景色はさ、言葉に出来ないほど、色鮮やかだった。だから——」

マキナは剣を鞘に戻し、手を差し出した。ゴ布林もまた、それに応じようとした、その時だった。

「ッ！？ なんだこの風は！？」

一瞬目が隠れたと思った次の瞬間に、暴風が巻き起こる。地に伏せ木々の隙間から空を見上げると、巨大な生物の黒い尻尾だけが見え、すぐに通り過ぎていった。

立ち上がるうとして、周りに生える木の一本が折れ、倒れようとするのが見えた。その方向は、丁度眼前のゴ布林のいる場所。彼はまだ気付いておらず、地面に伏せていたため今からではとても逃げ切れなかった。

「エンハンス身体強化ッ！」

迷わず魔法を自分に使い、地を蹴った。ゴ布林を突き飛ばし、しかしそこが限界だった。大きな重量を持った大木がマキナの背に押し掛かる。

あるいは、魔法によって正面からなら受け止めることも出来たかもしれない。だが、あまりにも態勢が悪かった。

自らの肉体が潰れる音を聞きながら、遅れて襲う激痛に意識を手

放した。

数分後。彼は意識を取り戻したが、もう手の施しようもなく、ただ空を見上げる事しか出来なかった。



二度とないと思つた意識の覚醒を、マキナは再び迎えた。

「俺は……死んだのか？」

「ええ、死んだわよ。しつかりきつかりみっちり死んだ。まあ、私が蘇らせたのだけど」

未だ水の中を漂うような不安定な意識を手放さないようにしつつ、目の前にいる怪しげな服装の少女を見やる。

「待ってくれ。確かに俺の体は潰れて——」

「ええ。だから私が与えたのよ、新しいカラダ」

マキナが咄嗟に自分の体を見回して、初めて異変に気付いた。「何だこれ、縮んでる？　というか、え……えっ？」

意識すると同時に違和感があふれ出す。まず声がいつもの数段高くなつていた。視点の低さから身長が縮んでいることにも気付く。

そして、全身をまさぐって確かめているうちに重大なものが体から失われていることによく気付いた。

代わりに与えられた、女性らしい二つの膨らみを掴んでマキナが叫ぶ。

「何で女になつてんだよおお！」

「何でって、そりゃあその方が便利だし」

どうやらマキナを襲つた異変の元凶であるらしい少女は、悪びれる様子もなく答えた。

「おいあんた、どんな魔法を使ったのかは知らないが、俺を男には

戻せないのか？」

「戻せるけど、戻さないわ」

マキナは少女に詰め寄りその両肩を掴んだ。

「おい、何だよそれ！　俺は男なんだぞ！　早く元に——」

「五月蠅いわね、土に還すわよ」

「ひっ、待った待った。分かったから」

慌ててマキナが肩から手を離す。少女は服の乱れを整えると手に持つ奇妙な裝飾が施された杖をマキナの眼前に突きつける。

「この杖には魂の器たり得る肉体を創造、操作する力がある。私はこれを用いて、肉体が壊れ行き場を失つたあなたの魂を救つた。あなたの魂を受け入れる肉体を創造したのよ。ここまででは理解して？」

こくりと頷くマキナ。

「で、話は変わるけど。誰かが落とし物をして、それを他の誰かが拾つたとする。それは誰の物？」

「まあ、少なくともこの国では拾い主の物だな。所有者の手を離れた時点で誰の物でもなくなっている」

「そう。その答えが聞けて満足よ」

マキナは少女の言わんとしているところに気付き苦い表情をする。「つまりこう言いたいのか？　失われる命を拾ってやったんだから、お前は私の物だつて」

「あら、物分かりの言い下僕は好きよ」

マキナは頭を抱える。

「私にはどうしても果たさなきゃいけない使命があるの。あなたにはこれからその為の手伝いをしてもらうわ。女にしたのは、旅する上で男と一緒にだと不便だから。余計な金は使えないしね。他に何か聞きたいことは？　とりあえずは近場の街に……と、そうだ。この魔物に礼を言っておきなさい。彼のお陰であなたは助かつたのだ

から」

少女が指さしたのはマキナが命を救ったゴブリンだった。

「あんたが助けを呼んでくれたのか」

「才、俺ノタメニ……」

「謝らなくていい。何だかんだで助かっちゃったからな。まあ、良かったよ。もし俺が本当に死んでたら、あんたらゴブリンにあらぬ容疑がかかってたと思うし」

涙を流して頭を下げる彼をマキナが宥める。

「で、私この辺の地理に詳しくないんだけど」

「詳しくないって、何か目的があるんだろ？ まだ聞いてないけど」

「いや、村を出たのがつい四日前で、それまで外のことは伝聞以外では何も知らなかったし」

「おいおい、それで旅って……いや、俺を助けたのは道案内をさせる意味もあったのか」

「ん？ え、ええそうね。そこまで計算済みよ」

少女は一瞬きよとんした後、すぐに自慢げな顔をして答えた。

「あ、怪しい。その様子だと旅費もどれだけあるか」

「村の倉庫から少しは価値ありそうな物拝借したけど」

「じゃあ、とりあえずは俺が今拠点に行っている街に行こうか。ここから東に二日行けば帰れる」

「分かったわ、いいでしょう」

「俺たちハドウセレバイイ？」

ゴブリンが心配そうに尋ねる。

「しばらくこの森にいてくれ。帰ったら依頼主と直接会う予定があるから、そのときに話してみる。……もし一向に連絡がなかったり、誰かから攻撃されるようなことがあれば、交渉は失敗したと思ってくれ。その時は、君たちに山を諦めてもらおうしかないな」

ゴブリンはそれを聞いて構わない、と答えた。自らの危険も顧みず命を救ってくれた恩人に文句は言えないと。

「そうだ、あんたの仲間たちの居場所だが——」



五人のゴブリンに手を振って見送られ、彼らは森をでて平原に入った。

「ここが東大陸有数の大平原、『竜王ヶ原』だ」

マキナがはるか地平線まで広がる草原を見渡しながら語ると、隣の少女がピクリと何かに反応する。

「竜王……」

「どうした、アデル？」

森を歩きながら互いの自己紹介を済ませていた。アデルと名乗った彼女の出身地をマキナは知らなかったが、この竜王ヶ原周辺だけでも数え切れぬほど町、村があるので別段おかしいと感じることはなかった。

「ねえ、竜王ヶ原と言うくらいだから竜が出るの？」

「いや、この名の由来は遙か昔、この地で勇者が竜を討伐したという伝説からとったものなんだ。………竜に興味が？」

「正式に従者になってもらったんだし、ここではつきり伝えておきましょうか」

断つたら土に還すって言われたらなあ、とマキナは思ったことをそのまま口にするほど愚かではなかった。

「私の目的、いいえ、果たすべき使命はね、私の故郷を焼き払った憎き竜を討ち滅ぼすことよ」

アデルはそう言って、きつと強く拳を握り、唇を噛みしめた。

「故郷を竜に？ それっていつの話？」

「私が旅立つすぐ前。もう、五日前になるのか」

彼女の言葉を聞いて、マキナは頭に疑問符を浮かべる。

「この近くでドラゴンが……？ そんな話は聞いていないぞ。竜が人里を襲ったなんて、この辺一体に警戒情報が入らないわけ——」

「あなたの言うことは知らないけど、この目で見た。あれは竜よ、それだけは間違いない」

アデルはその日について語った。

その日、私は村から少し離れた山中にいた。村の大人たちが妹にだけ用があるって言って、私だけ爪弾きにされてね。まあ適当に山菜なんか採っていた。

しばらくして戻ると、村中火に包まれてた。火だるまになって苦しむ近所のおじさんや、最早誰かも分からないぐらい焦げ付いた、知り合いだったはずの死体があった。

村の中心に黒い影が見えた。民家よりも大きなそれは、一對の翼を広げて口から火炎を吐いた。

妹は村の中心にある集会所にいます。私は、妹が生きていることを信じて走った。集会所に辿り着いたとき、気付けば竜の影は跡形もなく消えていた。

屋根の吹き飛んだ集会所。周りの大人たちが一人残らず倒れている中、妹は奇跡的に生きていた。私はあの子の手を引っ張って、無我夢中で走った。でも煙を吸いすぎたのか、すぐに体が動かなくなつて、妹の声が聞こえた気がして、気付いたら芝生の上に寝ていた。

全てが終わった後だった。隣に、妹はいなかった。いたのは死神を名乗るおかしな女だけ。彼女は私に一本の杖を渡してきた。死神は、あなたが可哀想だったからと言う。

死者を蘇らせる杖と聞いて真つ先に村の皆に試したけど、駄目だった。魂が失われたかららしい。

ただの平地になってしまった村の中で、私だけ助かったという現実にはなつた。どうしてこうなったのかと言えば、理由は一つしかなかった。だから、私は立ち上がった——。

「なるほど、大体の事情は分かった。……話して辛い思いをさせてしまったなら悪い」

「大丈夫よ。憎しみなら嫌と言うほど湧いて出てきたけど」

そろそろ日が沈みそうな時刻であった。

「そうか、復讐の為に竜を……。しかし、この時代に人を襲う竜が現れるとは」

「私はなんとしてでもあの竜を討たなくてはいけない。あいつの死を見届けるまで、終われない」

「辛い旅になりそうだが、乗り掛かった舟だ、付き合うさ。が、まずは夜が近いしキャンプの準備をしよう。火起こし用の薪はあるから、まずは燃え広げられないように周りの草を刈り取ってと」

マキナは慣れた手つきで周辺の草を剣で刈り、土の上に薪を置き、最後に小さく唱えた。

ファイアーボール

「火 球！」

彼の掌の上に拳大の火の玉が浮遊して現れ、それは置かれた薪の中心に落とされた。パチパチと音を立て、薪に火が付いたことを確認する。

その様子をアデルは呆けたように見ていた。

「……何コレ」

「あれ？ 魔法だけど、結構珍しかったり？」

「話には聞いてたけど、魔法って本当に魔法なのね……!」

「いや、人体精製したあんたに言われたくないよな」

「あれは貰った杖のお陰だし、使い方も持った時に何となく頭に入ってきただけだし。というか、主に向かつてあんた呼ばわりは止めなさいよ。……ん、アデルでいい。私もマキナって呼ぶから。良かったわね、女でもそこまで違和感ある名前じゃなくて」

「それは確かに思った。ジョージとかトムだったら困ってたな。偽名使おうにも魔法使ったらバレるし。で、その杖少し調べさせてくれない?」

「いいけど、あの死神には肌身離さず持つておけて言われたのよね」

マキナは地に座りながら杖を受け取るが、アデルの言うような現象が起きないことを告げる。

「俺が持つても何も感じないな。魔力もないただの杖だ。何か特別な魔道具だと思っただけだ。まあ、俺も専門家じゃないからな」

マジックアイテム  
杖をアデルに返す。アデルにも特に異常は感じられなかった。

「私の許可なくあんまりこの杖から離れると肉体と魂の接着が不安定になるみたいだから気を付けなさいね」

「ちよっ……! そういう大事なことは先に言ってもらわないと」

「まあ大丈夫でしょ。相当な距離カバードできるみたいだし」

「困ったご主人様だな、まったく」

火を囲い二人が座る。しばらくお互いの故郷の話などをして、既に日が沈んでからかなりの時間が経過していた。

「そろそろ寝ようか。火、消すぞ」

「うん……あ」

夜間で火がなければ視界もままならないと思いきや、むしろ火がなくても十分に視界が確保されていることにアデルが気付く。

「星、すごい」

「目が慣れてきたら、もっと見えるぞ」

草のベッドに寝転がり、マキナは夜空を望む。

「星天の女神様が管理する、最高の星空だ。運が良ければ、流星も見られるかもな」

隣では寝袋に入ったアデルが同じように星を眺めていた。この寝袋は元々マキナの持ち物であるが、旅慣れた彼がアデルに貸し渡した。

「ま、なんだ。復讐を止める気はないし、望むなら手伝いもするが、もし生き残ったただ一人として、自分の人生を歩もうと決めたなら、その時は道案内を買って出ようか。命の恩人だしな、それぐらいはさせてくれ。あくまで復讐に拘るとしても、その先には君の人生があることは忘れないでいて欲しい。……今日会ったばかりの自分が説教がましく言うことでもないかな。……なあ」

隣には、すうすうと寝息を立てるアデル。

「随分と寝つきが良いお嬢さんだな、おい。……冒険者の、グッドだぜ。さて、俺も寝るか」

マキナは周りに仕掛けた獣の接近を知らせる音を確認した後、草のベッドに再び横になりすつと目を閉じると、ものの数秒で眠りについた。経験とセンスのなせる業であった。

彼らの、旅の始まりの日が終わる。

続く

こんばんは。鵜和です。ありがとうございます。前回から買い換えたペンタブですが、なんだか若干書き心地が違うような気がしてきました。私は鈍いのですが、なんだか違うような気がしてきました。サイズは同じ…何が違うんだ…？先代のペンタブを繋いだのはかなり前なので当時弄った設定なんかもすっかり忘却これから一体どうなっちゃうの次回ペンタブが良くなるうと腕が上がる訳じゃないお楽しみに

こんにちは、マウスです。なんと！ ㄨ切当日にインフルエンザにかかりました。焼肉は食べに行けないし原稿は思ったほど書けないしで散々。まあもっと前から書いとけて話ならごもっともではありますが、物書き三人で自分が唯一ㄨ切二週前に5000文字近く書いてましたから努力している方だと思いますがね。残り二人？ ゼロですよゼロ。

どうもこんにちは、T.Kです。暖かくなったり寒くなったり、悪意のこもった気候が続いておりますが、みなさんお元気でお過ごしでしょうか。SAIHIKAの某ネズミくんのようにはなりませんよう、体調管理には十分お気をつけ下さいませ

ヒカルです。キャプテン・アメリカ ウィンターソルジャーを見ました。長官が持ってるスマホはHTC J ONEですね。なんだか嬉しくなりました。VR端末も出すし、ここからHTCの反撃が始まります。まあ、VR導入はPCのスペック的にハードルが高いので、見送ると思いますが。ヒカルでした。